

平成 26 年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

飛田 航¹・澁谷 拓巳²・横尾 美帆³・原田 桃佳³・後藤 武俊⁴

¹ 東北大学大学院医工学研究科

² 東北大学教育学部

³ 東北大学文学部

⁴ 東北大学大学院教育学研究科

本稿は、2003（平成 15）年度より活動を続けている「東北大学学校ボランティア」事業（以下、学校ボランティア）の 2014（平成 26）年度の取り組みを報告するものである。

1. 「学校ボランティア」概要

1.1. 実施体制

学校ボランティアは、東北大学大学院教育学研究科・教育ネットワークセンターの事業の一環として行っている取り組みであり、同研究科の後藤武俊准教授を顧問とした事務局を設置して運営を行っている。事務局は学生で構成されており、現在の局員数は 4 名である。また、川内南キャンパスの文科系総合研究棟 6 階にある教育ネットワークセンターに学校ボランティアの窓口を設け、ここで様々な活動を行っている。

学校ボランティアの活動先は、仙台市内の小・中学校であり、仙台市教育委員会（以下、仙台市教委）の学生サポートスタッフ事業に対して学生のボランティア派遣を依頼した学校が主である。仙台市教委経由の依頼の場合、学生は仙台市教委の学生サポートスタッフ事業のスタッフとして正式登録され、ボランティア保険や交通費の補助を受けることが可能である。また、年度末には仙台市教委より感謝状の贈呈が行われる。

1.2. 活動内容

学校ボランティアの活動内容は、学習指導補助、配慮を要する児童・生徒の指導補助、休み時間の話し相手、または課外活動の補助など、多岐にわたる。

1.3. 活動学生の募集及び派遣方法

事務局では、東北大学の全学生を対象として、3 種類の募集活動を行っている。

①教育ネットワークセンター前掲示板

②川内北キャンパス・マルチメディア教育研究棟 1 階 SLA サポート室前掲示板

③メーリングリスト

これらを通じて、仙台市教委から受けた活動依頼情報を学生に発信し、興味を持った学生がいた場合、その学生に事務局の支援体制やボランティア保険、交通費支給等の活動に関する

る事前説明を行った上で、学生を派遣するというのが基本的な流れである。

2. 平成26年度 学校ボランティアの活動状況

2.1. 学校ボランティアに関心を寄せる学生の特性

ここでは、前節にて述べたメーリングリストに登録している学生や今年度の活動者についての情報を提示し、学校ボランティアと学生の関係について考察する。

まず、メーリングリスト登録者の所属構成を表1に示す。なお、その比較として、今年度の活動者の所属構成を表2に示す。これらの表から読み取れることを以下に述べる。

始めに、昨年度と同様の特徴として、①教育学部・研究生のメーリス登録者数が多いこと、②文系と理系の活動者の割合に差が見られないことが挙げられる。文系と理系学部の割合はおよそ同程度であることから、学校現場でのボランティア活動に興味を抱く学生は文理を問わないことが示唆される。

一方、昨年度から変化した特徴として、4年生以上の活動者が多くなったことが挙げられる。4年生以上が全体の65%を占めている点は、2012年度の傾向に類似している。院生の研究の合間時間の活用の一つとして、また、教職を休職している院生の、教師としての働きを保つ方法の一つとして、「学校ボランティア」が利用されていることを活動者の声か

表1 学校ボランティアメーリングリスト登録学生の所属構成

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
教育学部	16	理学研究科	3
理学部	6	教育学研究科	2
工学部	3	文学研究科	2
文学部	2	法学研究科	1
経済学部	2	工学研究科	1
医学部	1	大学院合計	9
農学部	1		
学部合計	31		

(2015年2月現在)

表2 学校ボランティア2014年度活動学生の所属構成

学部	人数(人)	大学院	人数(人)
教育学部	2	教育学研究科	2
医学部	1	医工学研究科	1
経済学部	1	工学研究科	1
農学部	1	文学研究科	1
文学部	1	法学研究科	1
理学部	1	理学研究科	1
学部合計	7	大学院合計	7

(2015年2月現在)

ら知ることができた。今年度の広報活動は主に学部生を対象として行ったが、来年度からはそのような需要があることを踏まえ、院生対象の広報も行っていきたい。

次に、本年度活動者の活動開始時期を図 1 に示す。

学生が活動を始めるのは大学の授業期間の開始時期である、4 月から 6 月が多く、その時期での活動者数はすでに年度全体の約半数に達している。事務局では、「学校ボランティア」に初めて興味を持った学生から活動希望学生までを幅広く対象にした説明会を 4 月と 10 月にそれぞれ 1 回ずつ開催し、積極的に「学校ボランティア」の周知および活動者の募集を図った。このように、授業開始時期や説明会の開催などが、新しいことをはじめてみようという学生の気持ちを高める作用を引き起こしているのではないかと考えられる。

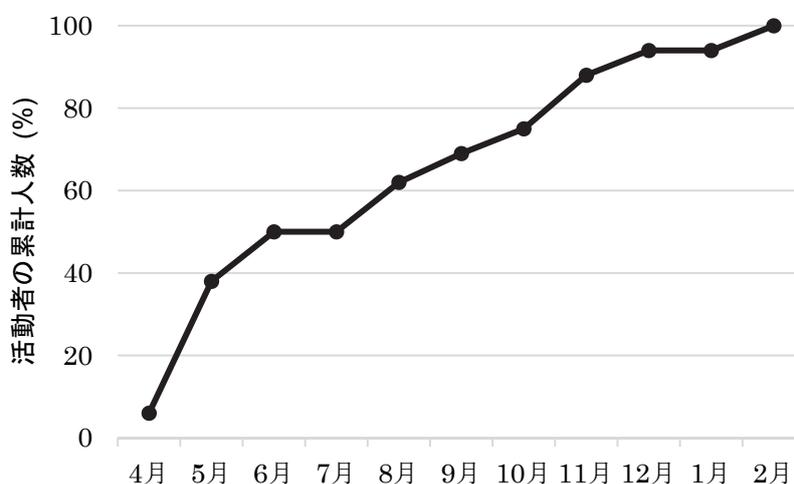


図 1 活動開始時期

※手続き日を活動開始日とみなしている。

2.2. 派遣学校の特性

まず、活動学生の派遣先学校を地図 1 および地図 2 に示す。地図 1 および地図 2 より、本年度「学校ボランティア」から学生が派遣された学校は、かなり広範囲にわたっていることが読み取れる。

また、年度別の小学校・中学校への派遣数を表 3、派遣学生数を表 4 に示す。本年度は仙台市教委から届いた 47 件の活動依頼のうち、11 件にボランティア活動学生を派遣した。活動学生の人数は実働 14 人、延べ 16 人である。また表 3 および表 4 より、派遣学校数は小学校、中学校で同じく 5 校であり、活動学生の数も、小学校 9 人、中学校 7 人と近い人数であった。小学校への派遣数が多かった昨年度までの傾向とは異なり、小学校と中学校の派遣学校数や活動学生数に大きな違いは見られなかった。



- A 仙台市立田子小学校
- B 仙台市立八幡小学校
- C 仙台市立国見小学校
- D 仙台市立広陵中学校
- E 仙台市立仙台青陵中等教育学校
- F 仙台市立第二中学校
- G 仙台市立上杉山通小学校
- H 仙台市立松陵中学校
- I 仙台市立南光台東小学校
- J 仙台市立八乙女中学校

地図1 派遣学校の分布（拡大図）



地図2 派遣学校の分布（全体図）

表3 派遣学校数の推移

	2013年度 (校)	2014年度 (校)
小学校	10	5
中学校	6	5
計	16	10

表4 派遣学生数の推移

	2013年度 (人)	2014年度 (人)
小学校	12	9
中学校	9	7
計	21	16

3. 学校ボランティアを通して得られたもの

ボランティア活動を行った学生は、活動終了後に事務局へ「活動報告書」を提出する。活動報告書は、あらかじめ事務局が作成した質問事項に学生が文書にて回答する形式である。活動報告書の質問事項は次のとおりである。

〇さん(△学部・1年)	
活動内容	活動内容(頻度・対象・行ったこと)はどのようなものでしたか?
感想	活動をしてみての感想をお聞かせください。
困った点	活動をしている中で、困った点などはありましたか?(子供に対して、学校に対して、事務局に対して)
要望	事務局に今後行ってほしいことなどがありましたら、ご意見をお聞かせください。

ここでは、この報告書に記載された学生の声を短期と長期の活動に分けて紹介する。

また、活動内容、意見・感想部分の文章は原文の通りである。なお、学校名が記載されている場合には伏せ字を使用した。

<短期の活動>

Kさん(理学部・2年)	
活動内容	夏休みのうちの連続した4日間の活動に参加しました。中学1年生から3年生までを対象として活動しました。この活動では自習をしている生徒への手助けをしました。具体的には、机間巡視をしながら、生徒の質問に答えたり、つまづいている生徒に助言をしたりしました。
感想	ボランティア事務局の方々や学校の先生方などの多くの支えのおかげで、活動の申し込みから活動に参加し終えるまで、円滑に物事を進めることができ、その分安心して活動に集中できました。結果、充実した時間を過ごすことができました。締め切り間際に申し込んだので定員の関係で一度は断られてしまったものの、学校側の寛大なお心遣いにより、最終的には受け入れていただき、ボランティアに参加する貴重な機会を得ることができました。その際の事務局の皆さんの迅速な対応と適切な指示は心強かったです。自分の他にも他大学、大学院の先輩方がこのボランティアに参加していました。その人たちの指導方法や生徒とのやり取りを側で見たり、お話ししたりすることで自分に足りないことや伸ばしていくべきことなど自分一人ではなかなか気づきにくいことを発見することができました。
困った点	特にありませんでした。授業がないはずの夏休みに、しかも部活動の合間を縫って生徒たちが自習しに来てくれたので、教える側である自分も気合いが入りました。そして、直接的であれ間接的であれ、学校の多くの先生方に支えていただきました。特に、校長先生からは多くの助言をいただきました。さらに、上でも述べたように、申し込んだのが締め切り間際だったということもあり、人数の充足の関係で一度は断られたものの、やはり受け入れてもらえるという非常に複雑な状況でしたが、事務局の皆さんの迅速な対応と指示のおかげで、4日間充実した時間を過ごすことができました。
要望	今後とも引き続きよろしくお願いします。

Oさん(工学研究科・博士課程1年)	
活動内容	日時: 12月24、25、26日の3日間(各2時間) 対象: 中学1、2年生 行ったこと: 冬休みの課題演習の補助 ボランティアは他校の学生を含め、24、25日は6人、26日は2人でした。ボランティアが2つのグループに分かれて、それぞれが1年生、2年生を担当しました。私は2年生の担当であり、2年生10人に対して机間巡視や演習の解説などを行いました。 生徒が演習として行っていた科目は、数学と英語が多く、数学では図形の合同と証明、英語は不定詞が主でした。国語、社会、理科に取り組んでいた生徒は少なかったです。
感想	中学生と間近で接することができ、多くのことを学ぶことができ、貴重な体験をさせていただいたA中学校の方や、斡旋していただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。特に強く感じたこととして、自分が十分に理解していることも、生徒が理解できるように説明するのは、想像以上に難しかったです。生徒一人ひとりがどういった点でつまづいているのかを即座に把握し、適切な説明をできることが必要になる能力であると感じました。質問が出なくても問題の解き方や考え方がわからず迷っている生徒を見逃さず、こちらから話しかけるなど、能動的に働きかけたり、説明に際しては、立ったまま見下ろすようにするのではなく、生徒と目の高さを合わせたりするなど、生徒とのコミュニケーションを円滑にできる工夫を意識する必要があると感じました。こういったボランティア活動には今後とも参加していきたいと思っており、今回のボランティア活動で学んだことを、以降の活動に生かしていきたいと思っております。
困った点	特にありません。
要望	特にありません。またお世話になるときは、よろしくお願いたします。

<長期の活動>

Tさん(医工学研究科・修士課程2年)	
活動内容	英語、体育、理科などの授業に同行し、先生の補助や一緒に運動したりした。英語では、子供たちが教科書を正しく読めるかチェックし、理科では実験の手伝いを行った。
感想	おもしろかったです。また、先生ごとに教え方などが異なり、色々な指導法があるのだと勉強になった。英語の授業では、私が知らないような知識や雑学を子供たちに教えており、とても楽しく、そして興味をもって取りくめた。
困った点	とくになし。2年目なので勝手が分かり、やりやすくなった。
要望	特にありません。これからも頑張ってください。

Yさん(文学部・2年)	
活動内容	週1回、2年生の教室に入り、集中できない子を特に見守ったり、わからないところを教えてあげたりしました。
感想	小学2年生とはいえ、集中できる時間や授業の理解には個人差があり、その子供たちを1つの教室で学ばせる難しさを感じました。それと、B小学校さんの学校ボランティアへの対応がすごくしっかりしていて驚きました。
困った点	特にありません。
要望	特にありません。

K さん(理学部・2 年)	
活動内容	2 週間に 1 度の頻度で活動をしました。中学 1 年生から 3 年生までを対象として活動しました。この活動では、自習をしている生徒への手助けをしました。具体的には、机間巡視をしながら、生徒の質問に答えたり、つまづいている生徒に助言をしたりしました。
感想	初めてボランティア活動に参加しました。ボランティア事務局の方々や学校の先生方などの多くの支えのおかげで、活動の申し込みから活動に参加し終えるまで、円滑に物事を進めることができ、その分安心して活動に集中できました。結果、充実した時間を過ごすことができました。次回の活動が前回の活動と比べて良いものになるようにと試行錯誤した経験は、将来先生になるかならないかにかかわらず、これから自分が生きていくうえで必ず強い味方になると確信しています。
困った点	特にありませんでした。授業がないはずの土曜日に、しかも朝早くから、生徒たちは静かに集中して自習していたので、自分も教えることに専念できました。そして、直接的であれ間接的であれ、学校の多くの先生方に支えていただきました。特に、教頭先生や学校サポートスタッフ担当の先生方からは多くの助言をいただきました。今回初めてボランティア活動に参加したので心強かったです。さらに、事務局の皆さんにはバスカードの支給で何度もお世話になりました。おかげで、長い通勤距離にもかかわらず大きな事故なく毎回の活動に参加することができました。今後とも引き続きよろしくお願いします。
要望	特にありません。今後とも引き続きよろしくお願いします。

T さん(農学部・4 年)	
活動内容	授業時の児童の学習支援を行った。 特に、配慮の必要な児童に対して学習補佐を行った。
感想	日頃小学生と接する機会が全くなかったため、非常に貴重な経験ができていると思う。 初めはどう接していけばいいのか戸惑う場面も多かったが、児童から親しみをもって接してくれてくれるのですぐに慣れ、自分自身楽しく活動することができた。 また、授業では主に配慮を必要とする児童の近くで学習の手助けをしたり、机間巡視で児童全体のサポートを行ったりした。 週に 1 回、午前中という非常に短い時間ではあり、また学生ボランティアという立場上どれほど教育の現場に貢献できているのかはわからないが、児童が、大学生である私との交流を通じてより開放的な学校生活を送ってもらえたらと感じている。
困った点	特にありません。
要望	特にありません。

H さん(教育学研究科・修士課程 2 年)	
活動内容	C 中学校で学習支援をしています。 6 月～12 月まで毎週 1 回の頻度で、本日 12 月 16 日現在で計 26 回実施しています。対象は C 中学校の 6 年生で、参加者は回により異なりますが 3～10 名程度です。対象教科は物理で、生徒の質問に答える、学習方法等の相談にのる、などです。
感想	休職中でもボランティアをすることで、自分自身の専門分野（物理）や学校教員

	としての勤を忘れずにいられるのでありがたいです
困った点	特にありません。
要望	特にありません。様々な業務とご支援、ありがとうございます。

Mさん(教育学研究科・修士課程2年)	
活動内容	行ったところ：K小学校 対象：主に特別支援学級のお子さんに対する学習支援と交流学級の際の活動補助(時々、通常学級内で支援が必要なお子さんに対する指導補助) 頻度：2014年9月までは週2回(火曜日と木曜日)→10月以降は週1回(水曜日)
感想	週1～2回ではありますが、子どもたちに継続的に関わることで、子どもたちが少しずつ変化しているのが感じられ、とてもやりがいのあるボランティアだと感じています。また、支援をしていく中で、「今この子に必要な支援はなんだろう?」、「担任の先生が今必要としている支援はなんだろう?」と悩んでしまったり、自分のかかわりが助けになっていないのではないかと反省したりする時もありますが、自分の支援によって、子どもが自分の力でできたり、わかるようになっていったりすることで、自分自身のモチベーションや自信につながっているような気がします。来年度から小学校の教員として働くため、学校現場を知り、子どもたちとかかわる機会としても、とても有用な場であると感じています。
困った点	特別支援学級の子どもたちの支援として入っていても、交流授業で通常学級に入ったりすると、通常学級内の支援が必要な子どもたちにも担任の先生のニーズがあったりして、支援に関しての現場の需要を察しながら支援をすることの難しさを感じました。また、ボランティアとして大学生が教室に入ること、日常と少し変わる部分があると思いますが、入ることによって日常のバランスを崩してしまっているような感じがするときもありました。例えば、私に懐いてくれたAさんが、私が支援でクラスに入ることによって私とおしゃべりをし、担任の先生の話が聞けなくなるような感じでした。その子どもにとっては大人(お姉さん的な存在)と話ができる大切な時間なのかもしれないのですが、そのかかわり方が難しく、悩みどころだなと感じています。
要望	特にありませんが、みなさんがどのようにボランティアとして関わっているのかを知るような場があってもいいのかなと思いました。具体的には、ボランティアをした人の体験談を聞く会のような形で、ボランティアを実際に行っている人だけでなく、ボランティアに興味がある人やこれからボランティアをしたいと思っている人も話を聞きに来られるようなイメージです。

Kさん(法学研究科・修士課程1年)	
活動内容	毎週月曜日に小学1年生を対象に授業補助を行いました。12月は冬休み等の影響により活動は2回でした。授業中は授業に集中できていない児童の支援を行い、休み時間中は児童の遊び相手となりました。
感想	授業中に児童が喧嘩をしましてことができました。その際、自分が仲裁に入り、授業をストップさせずに解決できました。 このような経験から、授業運営の役に立っているのではないかと感じました。
困った点	特にありません。
要望	特にありません。様々な業務とご支援、ありがとうございます。

Sさん(経済学部・4年)	
活動内容	週一回、小中学校、授業サポート

感想	実際の教育現場に触れ、面白い。
困った点	サポートすることを、頑張っ探していただいているような状況が心苦しい。

Gさん(文学研究科・修士課程1年)	
活動内容	頻度：毎週金曜日。1 時間目～6 時間目（2015 年 1 月からは 4 時間目までの予定） 対象：仙台市立 H 小学校 6 年 1 組 行ったこと：T2 として、学校生活全般（学習指導、生活指導、給食指導、清掃等）における児童の指導・補助。
感想	2011 年度から活動をさせていただいているため、教員や職員の方々とも顔なじみなので、スムーズに活動に入れた。また、6 学年の担当教師も昨年度からのモチ上がりの方が多かったのも、やりやすかった。教師として、どのように児童たちと向き合うべきかということ日々考えさせられた。担任の教師と共に、日常生活での児童間のトラブルをどう対処していくかを相談しながら、活動できたことは、貴重な経験だと思う。子どもらが親しげに声をかけてくれたり、休み時間に一緒に遊べたりすることは、大学の外での活動の機会を提供してくれるもので、非常に楽しかった。
困った点	思春期に差し掛かっているためか、児童の様子が変わっていくので、慣れ親しんだ児童の反応の違いに合わせて対応をこちらも変えていかねばならないこと。また、いじめにつながりそうな不穏な動きを察知して、早めに芽を摘む作業。

Oさん(教育学部・3年)	
活動内容	週に 1 回、全学年回りましたが、主に 6 年生対応が多かったです。授業中のサポート（つまづいている児童への声掛け）や、授業準備の手伝いをしました。
感想	児童との触れ合い方が児童の学年に応じて違い、なかなかうまくコミュニケーションがとれなかったのが印象に残っています。自分から積極的に声掛けするのが難しかったです。しかしそのことについて学校の先生方に相談したところ、アドバイスをいただくことができ、少し悩みが解消しましたし、何より勉強になりました。そしてやはり児童の学習をサポートし、「わかった」といわれることが活動を通して何よりもうれしかったです。
困った点	上述の通り、コミュニケーションをとるのが難しかったです。学校の方には、私の都合を最大限優先していただき、こちらが恐縮してしまうほどでした。
要望	特にないです。サポートありがとうございます。

Tさん(理学研究科・修士課程2年)	
活動内容	活動頻度は月 2 回で、主に土曜日における部活動(ギター部)指導です。具体的には、個別に助言や技能の指導をしたり、基本的な練習方法・体系を教えたりしました。学校の文化祭ではギター以外にもバンド演奏をするので、そちらについても私のできる範囲で指導しました。なお、8 月末のコンクール直前は週 3 回ほど通っていました。
感想	集中の続かない生徒や音楽の知識がほとんどない生徒に対して、どのように指導すればよいかかわからず、はたらきかけが消極的になってしまったように感じています。もともと、音楽科の先生ではカバーしきれないギターの技能面について補助をするとのことでしたが、その役割を果たせたのかいささか不安に思っています。私自身としては、多くのことを学ばせて頂きました。生徒数が少ない学校で、その地域(田舎)ならではの校風や習慣を知ることができましたし、生徒の保護者の方々とも接する機会がありましたので、とても良い経験になりました。今

	後の人生に生かしていければと思います。
困った点	遠隔地の学校なのではじめのうちは交通面で多少困りました。 (原付で片道40分以上かかるのですが、慣れば特に問題ありませんでした。)
要望	特にありません。今後とも、事務局のみなさんのさらなるご活躍を祈っております。

Oさん(教育学部・3年)	
活動内容	週1回活動しました。行くクラスは1年生の教室でほぼ固定されていましたが、学校行事や先生の都合で時々2年生の教室に行くこともありました。 机間指導のような形で、集中できない子のそばに付き添ったり、休み時間に一緒に遊んだり、学校行事で使う用具を作ったこともありました。
感想	ボランティアというより、自分が子どもたちと一緒にいて学ぶことが多く、楽しんで活動でき、子どもたちや学校のためというより自分のためになる経験ができたと思います。週1回しか行かないにも関わらず、行くと毎週子どもたちが寄ってきて、いろいろはなしかけてくれるようになったことがうれしかったです。学校現場の実際の様子を間近に見ることができ、勉強になりました。
困った点	週1回の活動だったので、なかなか子どもたちと打ち解けるのに時間がかかり、最初の頃は自分でも何をしたらよいかわからなくて悩みました。でも、時間がたつにつれ、慣れることができ、今では毎回楽しく活動させていただいています。子どもたちの中には、なかなか難しい子もいて、そういった子たちにどう接すればいいのかが大変でした。また、ボランティアのはずが、果たして自分がいることで何か役に立つのかと考えさせられることもありました。
要望	活動先の小学校を決める際にしか、事務局とかかわることができず、もっとご相談させていただいたりすればよかったのかと思います。

4. 平成26年度 学校ボランティア活動報告会・感謝状贈呈式

4.1. 活動報告会・感謝状贈呈式の概要

学校ボランティア事務局では、年度末に活動報告会と感謝状贈呈式を兼ねたイベントを実施している。学校ボランティアでは、他の学校で活動している学生の様子を知る機会が少なく、他の活動者がどのような活動をしているのかや、学校の雰囲気、学校から学生への対応の仕方など、このような情報の乏しさが問題点として挙げられる。そこで、情報提供や情報の共有化を目的として、活動者や活動希望者を対象とした交流の場を設けたイベントが活動報告会である。なお、このイベントは毎年恒例のものとなっている。

今年度は活動報告会の本質に顧み、「活動者の生の声」をメインテーマとし、実際に活動した方々の意見紹介に力を入れて実施した。

本年度の活動報告会の実施要項は次のとおりである。

【開催日時】 2015年2月6日(金) 15:00～16:00

【場所】 東北大学川内南キャンパス 文科系総合研究棟 306教室

【次第】 1. 開会のあいさつ

2. 2014 年度東北大学学生の活動状況

3. 活動者の声

4. 学校ボランティア事務局について

5. 感謝状贈呈

6. 事務局顧問挨拶（後藤武俊先生）

7. 閉会のあいさつ

懇談会（15:30～）

【参加者】 学生 2 名、仙台市教委 1 名、教育ネットワークセンター 1 名、事務局関係者 2 名、計 6 名

今年度は、事務局員数名が諸事情によって参加できなかったことに加えて、SLA サポート室の方々への事前告知がうまくいかなかったために、例年よりも人の少ない活動報告会となった。また、参加した学生の人数は例年と変わらないものの、事務局としては更なる参加学生数の増加を望むところである。

5. 平成 26 年度 事務局活動状況と課題

5.1. 活動状況

事務局の基本業務は主に、広報・活動者募集活動と活動者向け活動（各種手続きを含む）に分類される。

広報活動について、本年度は、前期に開講された全学教育教職科目（主に 1 年生対象）の講義において、学校ボランティアについての紹介を行った。さらに、教育ネットワークセンターを通じて、教育学部の新入生へのチラシ配布を行ったほか、教育学部棟の 1 階および 6 階に常設のポスターを掲示した。また、全学部生への広報を行うために、川内北キャンパス SLA サポート室の協力を得て、同室へのポスター掲示と活動内容の詳細が記されたファイルの設置を行った。その他、新規活動者を対象とした説明会を 4 月と 10 月に行った。

活動者向け活動について、この活動が事務局の中核業務である。学生からの活動希望を受けると、事務局員が活動希望学生に対して学校ボランティアに関する説明を行う。この説明では、活動までの手順や活動に際しての注意事項、保険や交通費に関する事項が含まれる。また、事務局員は仙台市教委による研修会を年一回受講しており、その内容に基づいた説明を学生に対して行う。次に、派遣先となる学校側にボランティア内容の詳細を確認するほか、学生のニーズを踏まえた調整を行う。このような一連の手続きを経て晴れて活動開始となるが、活動開始以降も随時、必要があれば連絡を取り合い、学生のサポートを行う。

また、今年度から新たに始めた取り組みとしてネットワークセンターでの待機や Facebook の開設、依頼小中学校の地図表示などが挙げられる。

ネットワークセンターでの待機とは、事務局員が各自都合の良い日時を指定して、ネットワークセンター内で待機する時間を設け、その時間に各々の作業を行うといった取り組みである。時には、活動者や活動希望者が訪ねてくることもあり、その対応にあたる。これは従来、事務局と学生のやり取りがメールで行われていたため、詳細を直接聞きたい学生がネットワークセンターを訪ねてくるのだが、事務局員がおらず対応に困るといったネットワークセンターからの要望を受けて開始したものである。この取り組みを行ったことにより、事務局員各自の作業を進める時間が確保できたほか、やってくる学生側も事前のアポイントメントを必要とせずに気軽に訪問できるようになったため、お互いにとってとてもメリットの大きい取り組みであると考えられる。

また、今年度から Facebook を開設して情報発信に力を入れた。これは、学校ボランティアの認知不足を解消するために始めたものである。現在の情報社会においてインターネットを利用した情報発信はとても有効であり、今回は学生などの若年層で広く普及している Facebook を活用した。更新の際には、できるだけ写真などを含めた記事をアップロードするようにしており、視覚的に分かりやすく、なおかつ、訪れた人がさらに興味を抱くような記事になるように工夫を凝らしている。

さらに、依頼小中学校の場所を地図上に表示する取り組みも行った。これは、仙台に来て間もない学生は学校の名前を聞いただけでは場所が分からず、毎回自分でその場所を探さなくてはならないといった手間が従来のシステムでは存在した。そこで、Google map を活用して学校の場所をオンラインで表示するシステムを構築した。このため、学校名と所在場所を一目で確認することができるようになった。このシステムを有効に活用するため、依頼案件の情報をメーリングリストで流す際に地図の URL を貼りつけてこのシステムを閲覧できるようにしたほか、ネットワークセンター前の掲示板にも地図を印刷したものを掲示した。そのため、従来よりもスムーズに希望の活動を探すことができるようになったうえに、学校の場所からボランティアを探すといった新しい探し方もできるようになった。

5.2. 本年度の課題と来年度に向けて

ここでは、学校ボランティア事業とその運営を行う事務局が今後のよりよい発展を遂げるために、本年度、事務局として行ってきたことから得られた課題や来年度に向けての改善点などを各事務局員の視点から述べる。

今年度の活動を振り返ると、市教委と学校、そして事務局の連携にさらに力を入れる必要があると感じる。例えば、活動希望者の情報を市教委に渡せば、あとは学校から学生に連絡が届く仕組みになっているのだが、1週間たっても学生に連絡が届かないといったことがあり、結局市教委や学校で業務が滞っていたということが何件かあった。これは、事務局が学校や市教委と学生の中の仲介者であることに起因する問題ではあるが、市教委から学校に、

学校から学生に連絡を行った際に、我々に連絡を貰えるようなシステムが構築できれば、前述の問題は解決できると考える。そのためには、市教委や学校と事務局との連携の強化が強く望まれる。(T)

始めに、先にも述べたが、今年度の広報の対象と、実際の活動学生の属性には開きがあった。メーリス登録者の割合から見てもわかるように、今年度の広報は主に学部生を対象として行ってきたが、実際は修士や博士課程の学生の活動が多かった。やはり、履修科目の多い学部生が平日に活動することにはやや困難が見受けられる。学部生には、日にちの絞られた短期の活動を特に広報していくなどの対応を変えていくことが求められているのではないか。院生に対しての広報は、まず、メーリスに登録してもらおうということを広めていきたい。今年度の院生のメーリス登録者数が 9 人で、活動者が 7 人であり、活動者全員がメーリス登録者というわけではないが、メーリス登録者数に対する活動者の割合が、78%にも上る。学部生のメーリス登録者数に対する活動者の割合が 23%であることから鑑みても、特筆すべき数字である。院生の入試の際にもビラを置いたり、院生が通る通路に広報ビラを貼ったりと、地道な広報をしていきたい。

次に、報告書の活用についてである。昨年度や今年度は、報告書を事務局が精読し、今後には生かす目的に主として利用してきた。しかし、実際に活動した学生の声は、これから活動しようとする学生にとっても得るものが多いはずである。今年度は、活動報告会告知のメーリスで一部引用したのみであったが、来年度からは、個人情報などに留意しつつ、報告書をさらに多目的に広報へ活用していきたい。

また、報告書に関連して、ある活動者の報告書に、「サポートすることを、頑張って探していただいているような状況が心苦しい。」という文面があった。また、新しく入ってくださった事務局員がメーリスに登録したはいいが、なかなかメーリスが回ってこないと話していた。このように聞くと、メーリス登録者や活動学生と事務局の距離の取り方が難しいと感じる。困ったことや不安に思ったことを気軽に相談してもらうためにも、事務局とそれぞれの学生の距離は近いほうがよいとも考えられる。そのために頻繁にメールのやり取りをしたり、スキップカードの月 1 回のはんこの捺印システムを作ったりしてきた。しかし、実際には、メールを頻繁に送って受け手の学生の負担になったり、システムが形骸化してしまったりしている。その一方で、事務局と学生の距離が遠くなりすぎ、メーリスが回ってこないと話す学生もいる。目の前のメール対応やメーリスを配信するだけではなく、複数いる事務局員で、それぞれ包括的な視点を持ち、学生に対する距離を確認しながら協力して活動をサポートしていくのが理想である。

最後に、活動報告会について、参加学生がとても少なかったのは大きな課題である。テスト期間中ではあったが、このように、活動者同士、仙台市教委さんと事務局員と、同じテーブルに座って互いの意見を交換できる機会はとても貴重であるので、学生には参加してもら

いたかった。今年度は広報が1週間前にすらできていなかったもので、来年度からは早め早めの広報で、予定が空いている学生にさらに参加してもらえることを期待している。(Y)

今年度は前年度に比べて活動者の減少が見られました。

今後の本学の学生のボランティアをより活発なものにしていくためにも、絶えず学生・学校の事務局へのニーズを敏感に察知し、活動の質を変えていく必要があると感じました。

事務局の人数は本年度は実質3人の学生で行うという体制になり、昨年度と大きな変化は見られませんでした。今後、より多くの学生の支援を行うことを考えると事務局の拡大も必須事項です。

現体制をもっと分業化し個人の役割分担をはっきりさせていくことが、事務局拡大に備えての準備になると思うので、来年度は事務局の体制強化も含めて、新しいことに積極的にチャレンジしていきます。(S)